
元悪魔とネギまの世界

翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

元悪魔とネギまの世界

【Nコード】

N2299U

【作者名】

翔

【あらすじ】

上位の悪魔に逆らったせいで、人間界へと追放されてしまったイルディ。

さらに悪魔の体から人間の体になっていた。追放された世界はネギまの世界。

やることもないイルディは、麻帆良学園でネギのサポートをすることになる。

しかし、彼の介入したことで物語は捻れ始める。

人の身でありながら、人ではない彼はいつたい何を見るのだろうか？

独自解釈、独自設定が含まれています。久しぶりの作品なのでグダグダすることが多々あるかもしれません。作者は描写が下手なので原作知識は必要かも。閲覧の際は、そのあたりを了承して読んでいただけると幸いです。

プロローグ（前書き）

久しぶりの作品なのでグダグダするところもあるかもしれませんが、大目に見てください。

ブローグ

「ぐっ……」

体中を殴られ、倒れこんだまま自分を見下ろす男を睨んだ。

「ここまで一人で来たことはほめてやろう。だが、本気で私を倒せ
ると思っていたのか？ だとしたらずいぶんと傲慢だな」

「……あんたほどじゃないさ」

軽口を返す少年。

「くくく、確かに。だが、そうでなければ王など務まらない」

男と少年は人ではなかった。

人の姿をした異形——悪魔であった。

「……俺を、どうするつもりだ？」

「ふむ、本来であれば、消滅させるのが掟だが……。私はお前に少
々興味がある。よって——お前を人間界へ追放する」

「何？」

人間界へ追放されるということは、悪魔としての能力を失うとい
うことだ。

「幸い、これから送り出す世界には魔法というものが存在している。つまり、お前は魔力を失うことはない」

と言っても、と男は続ける。

「魔力があるうがなろうが、お前にとっては関係ないだろうがな」

「……………」

少年は黙って男を睨み付ける。

「では、行くがいい」

男が手をかざすと、少年の意識は遠のいていった。

気づいた場所は開けた広場のような場所だった。

「ここが、人間界」

予想以上の魔力を感じる。

この場所自体が何かの魔術、または魔法によって結界が張られている。

「さて、これからどうしたらいいんだ？」

とりあえず自分のできることを確認する。

魔力——自分の中に存在することを確認。

肉体——悪魔のものではなく、人間のものであることを確認。

精神——悪魔のころの記憶があることを確認。

能力——過去、未来共に視ることはできないことを確認。

「はぁ……」

これでは本当にただの人とほとんど変わりがない。

ため息をついていると、背後に気配がした。

「誰だ？」

「それはこちらの台詞だ。貴様こそ、何者だ？」

振り返ると、金髪の少女が木の上に立ち、こちらをうかがっていた。

美しい。

月の光に照らされる少女をみて、ただ、そう思った。

「結界の中で魔力を感じた。それは貴様か？」

「……何のことだか。俺は気づいたらここにいたのさ」

「ふん、そんな馬鹿なことがあるわけがわけがなかつた」

しばらくにらみ合いになる二人。

「まあいい、力ずくで喋らせるまでだ」

少女のほうは一方向的に話を終わらせると、魔法の詠唱を始めた。

そして、試験管のようなものを投げつけてくる。

「氷爆」

言葉と共に冷氣と爆風が自分に襲い掛かる。

「何だ。この程度か？」

しかし、腕に魔力をまとい爆風をかき消す。

「ちっ、レジストしたか。リク・ラク・ラ・ラック・ライラック――」

懲りずに詠唱を始める少女。

しかし、これ以上の無駄な戦闘を避けるために行動に移した。

「そこまでだ」

「なっ!？」

自分を侮っていたのだろう。

少女には自分を捉えることはできなかったらしい。

驚いたように振り返ろうとする。

「動くな」

魔力をまとった手を少女の首筋にそえる。

「あんたの名は？」

「……名前を尋ねるときはまずは自分からではないか？」

抵抗する気はないのか、そんなことを口に出してきた。

一瞬、呆けた顔になっていたのは仕方ないだろう。

「これは失礼した」

少女を解放すると、彼女の前に立った。

少女ももう戦う気はないのか、黙ってこちらを見ている。

「俺の名はイルディ。元悪魔だ」

プロローグ（後書き）

正直、エヴァがこんな簡単に負けるわけがない。

第一話 元悪魔と自己紹介（前書き）

キャラの口調と性格が掴めない

第一話 元悪魔と自己紹介

「俺の名はイルディ。元悪魔だ」

目の前の男はそう名乗った。

年齢は十五歳から十八歳といったところか。

「元悪魔だと？ 悪魔が人の体をしているはずがないだろう」

男の体はどう見ても、魔力で維持されたものではなく人間のそれだった。

「だから、元悪魔だと言ったはずだ」

男——イルディは困ったように頬をかいた。

その仕草から見ても、とても悪魔とは思えなかった。

「それで、あんたの名前は？」

「……エヴァンジェリンだ」

「エヴァンジェリン……」

イルディは何度がエヴァンジェリンの名前を呟いていた。

そして、

「エヴァンジェリン」

「何だ？」

「実にいい響きだ。あんたによく似合っている」

「は？」

ここ数十年。

いや、数百年。

そんなことを真顔で言われたことはなかった。

エヴァンジェリンは、大抵の魔法使いから忌み嫌われる『悪の魔法使い』だったからだ。

「どうした、変な顔をして？」

一瞬、呆けた顔をしたエヴァンジェリンを、心配そうに見つめるイルディ。

「何でもない。それより、お前は」

「エヴァ、その少年は何者だい？」

ちょうどそこへ、メガネをかけた男がやってきた。

「タカミチか。本人が言うところには、元悪魔らしいが」

「悪魔!？」

それを聞いて、タカミチはイルディに戦闘態勢をとる。

「まあ待て、幸いこいつには敵意は無いようだし、ジジイのところに連れて行くぞ」

ついて来い、とエヴァンジェリンが先導し、イルディが後に続く。

その後ろをタカミチが続く。

イルディが妙な動きを見せたら、すぐに対処できるようにだ。

しかし、その考えとは裏腹に、イルディはまったく言っていないほど無防備だった。

「ところで」

イルディを観察していると、彼がタカミチに話しかけた。

「ここは一体何なんだ？ 人間界にしては周囲にある魔力量が尋常じゃないぞ」

「……学園都市。簡単に言うと、学校だよ」

「学校？ ああ、学び舎というやつか」

なるほどなるほど、と感心したように頷くイルディ。

「何をぼさっとしている！ さっさとついて来い!」

エヴァンジェリンが怒鳴りつけるのを聞いて、急いで二人は後に続いた。

「驚いた、学園長と聞いて人間だと思っていたんだが、まさか異形の類だったとはな」

イルデイが学園長の姿を見たときに、最初に発した言葉がそれだった。

「残念ながら、人間だ」

エヴァンジェリンが答えると、イルデイはますます驚いた表情を浮かべた。

「……まったく、失礼な少年じゃな。して、君は本当に悪魔なの？」

「エヴァンジェリンにも言ったが、元悪魔だ。魔力はあるが悪魔としての能力は使えない」

やれやれといった風に両手を上げるイルデイ。

「では、なぜ麻帆良にやってきたのかね？」

「それは……」

「それは？」

あー、うー、と唸っていたイルディだったが、決心したのかこころへ来るまでの経緯を話すことにした。

「負けたからだ」

「負けた？」

「偉い悪魔がいるんだが、そいつに逆らって勝てなかった。結果、人間界に追放されたわけだ」

本来であれば消滅させられることは黙っておく。

「それで、君はこれからどうするつもりなのかね？」

先ほど以上に鋭い視線を向けてくる学園長。

返答次第では、彼が相手になるかもしれない。

それを意に介した風もなく受け流すイルディ。

「そうだな……。せつかく人間になったわけだし、この世界を見て回るのも悪くない」

「じゃが、金はどうするんじゃ？」

「金？ そんなの……、考えてなかったな」

悪魔のときであれば、体を変化させてどこでも行くことができるのだが。

「ふおっふおっふお、では、この学園で働くというのはどうじゃ？」

「学園長!？」

タカミチは驚いた様子で学園長を見る。

エヴァンジェリンは最初から分かっていたかのように、当然といった様子でそれを見ている。

「いいのか？ 自分で言うのも変だが、得体の知れない悪魔、もとい人間をおいておくなんて」

「よいよい、人手が増えればわしも助かるしの」

学園長の笑いに胡散臭げな雰囲気を感じ取ったが、素直に従うことにした。

「そうか、よろしく頼む」

「ついでに戸籍も作っておこう。身分が証明できなければ、仕事も出来んしの」

「ありがたい。後は寢床が確保できれば言うことなしなんだが……」

「なら私の家に来い。お前には興味がある」

エヴァンジェリンの言葉にタカミチと学園長は目を丸くする。

「いいのか？ 不法侵入者をそう簡単に家に呼んで」

「かまわないさ。それでも人を見る目はある」

見つめあうイルディとエヴァンジェリンだが、二人の間には不穏な空気が流れている。

二人だけにしてしまえば、戦闘が起こるような気配だ。

「こほん、では明日の朝にまたここに来てもらえるかね？ 仕事の内容はその時話そう」

「了解した」

「では行くぞ、ついて来い」

エヴァンジェリンにつれられて、イルディは学園長室を後にした。

「学園長、彼は本当に悪魔なんでしょうか？」

イルディがいなくなった学園長室で、タカミチと学園長が話している。

「彼から感じる魔力は微量でした。しかし、エヴァの話では彼女を圧倒したそうです」

「人は見かけによらんというわけじゃな」

実際のところ、まだイルディが悪魔、正確には元悪魔なのだが、

それを完全に信じたわけではなかった。

しかし、結界の中に突然現れたというのもまた事実。

「ですが、学園長。彼をネギ君のサポートにつける気じゃありませんよね？」

「……駄目かね？」

「危険すぎます！」

「じゃが、エヴァは彼のことを認めておった。つまり、彼女にとって、彼は信用に値するということではないかね？」

「それは……」

「とにかくじゃ。彼の力量がわからないうちは、下手に手を出すとやぶ蛇かもしれんからの」

「……はい」

納得しきれない様子で、タカミチは頷いた。

「へえ、エヴァって吸血鬼なのか」

「ああ。それにしても、元悪魔のお前が私より年下だったとは思わなかったぞ、イル」

エヴァンジェリンとイルディが彼女の家に着くころには、すっかり打ち解けて愛称で呼び合うようになった。

「まあな。まだ百年くらいしか悪魔として過ごしてなかったしな」

「それ以前は、お前は何をしていたんだ？」

「……まあ、いろいろあったのさ。あつ、あれがエヴァに家か？」

「あ、ああ、そうだ」

無理やり話をはぐらかされた気もしたが、そのうち聞けるだろうと思い、深くは追求しないことにした。

ドアを開け、家の中に入る。

そこにはファンシーなぬいぐるみや人形が置かれてあった。

「……エヴァって意外と」

「何だ？」

「いや、なんでもない」

「……どうせ、子供っぽいとか思ってたんだろ？」

「……思ってますん」

「いきなり敬語になる時点で白状しているようなものだろ！」

「お帰りなさい、マスター。……そちらの方は？」

エヴァンジェリンが叫んでいると、奥から一人の少女がやってきた。

「ああ、こいつは——」

「俺の名はイルディ。元悪魔だ」

よろしく、と言って頭を下げると、少女も頭を下げた。

「初めまして、私マスターの従者をさせていただいている絡操茶々丸と申します」

「茶々丸、こいつに部屋を用意してやれ」

無表情のまま首をかしげたが、すぐに頷いた。

「はい、マスター」

礼をして下がっていく茶々丸を見て、イルディは思ったことを口にした。

「礼儀正しい、いい子だな、茶々丸は」

「ふん、当たり前だ。私の従者だからな」

「従者？　なるほど、どうりで……」

一人納得するイルディをおいて、エヴァンジェリンは自分の部屋

へ戻ると言っ。

「忌々しいが、明日は学校へ行かなければならないからな」

はき捨てるように言っ、エヴァンジェリンは部屋に入った。

しばらくソファに座っていると、茶々丸がイルディを迎えに来た。

「こちらです、イルディ様」

案内されると、広くはないが一人が眠るには十分な部屋が用意されていた。

「ありがとう、茶々丸」

「いえ、マスターのお客様ですから、これくらいは当然です。それでは」

部屋のドアを閉めて、茶々丸は退室していった。

イルディは用意されたベッドに横になる。

出会った人間が話の分かる人たちでよかったと、彼は心からそう思った。

「といっても、あの学園長だけは好きになれそうもない」

あれは目的のためならばどんな手でも使っだろっ。

「ま、考えても無駄か」

イルディは目を瞑った。

こうして、夜は更けていく。

第一話 元悪魔と自己紹介（後書き）

次の話は今執筆中です。

感想等は受付中なので、おかしい点がありましたら教えてください。

第二話 元悪魔と生徒の顔合わせ（前書き）

生徒たちとの顔合わせです。

第二話 元悪魔と生徒の顔合わせ

「おはよう、茶々丸」

「おはようございます、イルディ様」

朝起きて、イルディが部屋を出ると、茶々丸が朝食の準備をしていた。

「イルディ様、ね」

「お気に召しませんでしたか？」

「いや、エヴァも俺のことをイルって呼んでるわけだし、茶々丸にもそう呼んで欲しい」

「分かりました。ではイルさん、と」

それを聞いて満足そうにイルディは微笑んだ。

「よし、それじゃ朝飯を作るのを手伝うから」

「え……、ですが」

「一人じゃ何かと大変だろ？ それに、俺も久しぶりに料理したくなっただけ」

「そうですか。では――」

茶々丸の指示で、二人は朝食の準備を進める。

最初は作ることに不安定さを覚えていたが、茶々丸に教えられてだんだんと理解していった。

「で、これをお前が作ったのか？」

「そうだ」

テーブルに並べられた料理をまじまじと見るエヴァンジェリン。

そこにあつたのは、茶々丸の料理と比べても引けを取らないものだった。

「見た目はいくらでもごまかせる。問題は味だな」

そう言って、ぱくりと口に入れた。

「……………」

「感想を、と思ったが聞くまでもないようだな」

くくく、と意地の悪い笑みを浮かべるイルディ。

エヴァンジェリンは悔しそうに、

「ま、まあまあだな」

と言った。

「嘘だな」

「嘘ですね」

「何だと？ 茶々丸までそんなことを言うのか？ この巻いてやる！」

「ああ、マスター、そんなに巻いては」

「おいおい、朝飯くらい静かに食べるよ」

「お前が原因だろうが！」

笑いだすイルディ。

怒鳴るエヴァンジェリン。

おろおろする茶々丸。

エヴァンジェリンは思った。

こんな騒がしい日常が、たまにはあってもいいと。

エヴァンジェリンたちとの朝食を終え、イルディは一人、学園長室へと向かった。

「入るぞ」

「おお、待っておったぞイルディ君」

学園長室に入ると、学園長とタカミチがイルディを待っていた。

「それで、俺の職と戸籍とやらはどうなったんだ？」

「戸籍のほうなんじゃが、姓のほうが決めかねておるんじゃ……」

「せい？ ああ、名前か。それならイルディ・ヘレティックでどうだ？」

「君がよいのならそれでよいじゃろ」

学園長が仕事の話を持ち出す。

「君には教師としてこの学園で働いてもらうことになるんじゃが、いいかの？」

「いいだろう」

「ふおっふおっふお、ではイルディ君には2・Aの副担任をしてもらおうかの」

「ふむ、分かった。それで担任はタカミチなのか？」

「いや違うよ。たぶんもうすぐ来るころじゃないかな」

「失礼します」

ドアを開けて入ってきたのは、メガネをかけた少年だった。

ネギは朝早く呼ばれて、学園長室の前に来ていた。

「失礼します」

彼が学園長室に入ると、タカミチと学園長、それと見たことのない男性が立っていた。

「ほう、この子供が先生なのか？」

「そうとも、名をネギ・スプリングフィールドという」

自慢げに話す学園長に、ネギは少しうれしくなった。

「あの、それで学園長先生。僕を呼んだ理由は何でしょうか？」

「そろそろ期末テストの時期じゃし、一人では心細いだろうと思つての。副担任をつけようと思ったのじゃ」

「えっ、それじゃあ、タカミチが？」

「残念だけど、僕じゃないよ。副担任になるのは彼だ」

タカミチの視線の先には、先ほどの黒髪の青年が立っていた。

「始めましてだな。ネギ・スプリングフィールド先生」

「は、初めまして」

「俺の名はイルディ・ヘレティックという」

ネギから見たイルディの第一印象は怖そうな人だった。

イルディから見たネギの第一印象は幼すぎる人間だった。

「へえ、ではネギ先生は修行のためにこの学園で教師を？」

「はい。僕の担当しているクラスの人たちも、個性的な人たちですけど、悪い人じゃないですよ」

「ふむ、そうか」

ネギと会話をしながら廊下を歩いていく。

ネギもだんだんと打ち解けてきたのか、表情も明るくなった。

「着きましたよ。イルディさんは呼んだら入ってきてください」

「了解」

教室に入るネギを見ながら、イルディは思った。

本当にこんな奴が教師で、この学園は大丈夫なのだろうかと。

「えー、今日から新しくこのクラスに副担任の先生が来ることになりました」

教室の中が騒がしくなる。

それほど騒ぐことだろうか？

「それではイルディさん、入ってきてください」

ガラッと、戸を開け中に入ると、クラス中の視線がイルディに向けられる。

「イルディ・ヘレティックだ。今日からこのクラスの副担任をすることになった。よろしく頼む」

『カッコいい！』

クラス中から黄色い歓声が響いた。

「はいはい、先生に質問してもいいですか？」

「いいだろう、確か朝倉和美だったな」

「もう名前覚えてるんですか？」

「名簿を見せてもらったからな」

教室に来る途中、ネギから名簿を見せてもらっていたのだ。

「では質問です」

すーっと息を吸い込む朝倉。

「名前は？」

「イルディ・ヘレティック」

「年齢は？」

「十八歳」

「出身地は？」

「イギリス」

「趣味、特技なんかありますか？」

「趣味は人間観察、特技は……不器用だから特にならない」

「付き合っている人はいますか？」

「付き合う？ 男女での交際という意味ならいないな」

「そうなんですか？ せっかくカッコいいのにもったいないですね」

「ほめ言葉として受け取っておこう」

こほん、と仕切りなおしたように朝倉は咳払いする。

「それでは最後に、このクラスに気になる女の子はいますか？」

「ふむ……」

イルディは考える。

正直、気になると言えば、このクラス自体が気になるのだが……。

「他の生徒にひいきしていると思われるはいけないからな。その質問には答えられない」

「えー」

「仮にも教師としてここに来ているからな。公私の混同は避けなければならぬ」

「えーと、それじゃあ……」

その後も他の生徒からの質問攻めに遭い、終了を告げるチャイムが鳴ったのだった。

第二話 元悪魔と生徒の顔合わせ（後書き）

ネギと主人公をどうからませるかが悩みどころでした。

第三話 元悪魔と裏の顔合わせ（前書き）

戦闘描写が難しい。

第三話 元悪魔と裏の顔合わせ

授業が終わり、放課後になる。

イルディは再び学園長室に呼ばれていた。

「それで、俺を呼んだ理由は何だ？」

「まあそう慌てんでもよい。ところで君から見たネギ君はどうかね？」

「そうだな……。一言で言うなら、幼すぎる」

教え方としては分かりやすいのかもしれないが、出来の悪い生徒に対して子供だからこその残酷さがあった。

といっても、生徒自身はあまり気にしていないようだったが。

「まだ十歳じゃし仕方ないじゃろ」

「あんたがそういうんなら、別にいいんだけどな」

「君を呼んだのは他でもない。魔法先生たちに君の実力を見せてもらおうと思っただけ」

「魔法先生？」

「簡単に言うと魔法を使える先生のことじゃな」

「それは分かったが、なぜ実力を見せなければいけないんだ？」

「魔法を使える人間としてこの学園に来た以上は、他の魔法先生からの信頼を得る必要があるんじゃないよ」

「なるほどな」

得体の知れない人間を置いておく気はないというわけか。

「それと、君が元悪魔だということはなるべく他の人間に知られんように」

「分かっている。教えたところで信じはしないだろうがな」

「では、時間になったら世界樹の前に来てくれるかの？」

「世界樹……、あの馬鹿でかい魔力を感じる大木か」

夜。

月明かりが照らすころ。

イルディは世界樹の前にやってきた。

そこには何人かの人間がいた。

下は中学生くらい上は三十代以降といったところか。

もちろん、学園長を抜いてだが。

「まさか俺のためにこんなに人間が集まってくれるとはな」

中にはイルディの受け持つ生徒の姿も見受けられるが、特に驚きはしなかった。

彼に向けられる視線は、表の頃と打って変わって、怪しいものを見るような目だ。

「それで、誰が俺の相手をしてくれるんだ？」

「わしとしては刹那君を指名したいところなのじゃが……」

「却下だ。彼女は俺の生徒だし、何より女性を殴る趣味はない」

「では……」

「学園長。ここは僕に任せてもらえませんか？」

「タカミチ君か」

タカミチが名乗りを上げたことで、周りの魔法生徒、魔法先生がざわめく。

相手の青年は勝てない。

誰もがそう思った。

「タカミチが相手か、これは気が抜けなさそうだ」

イルディは困ったように肩をすくめた。

「判定基準はどちらかが降参した場合、またはわしが勝負ありと判断した場合じゃ」

「了解した」

「では、始め！」

イルディとタカミチは向かい合う。

タカミチはポケットに手をつ突っ込んでいる。

余裕の表れか、否、これが彼の構えなのだろうとイルディは判断する。

「先に攻めさせてもらっよ」

「好きにしる」

その言葉でタカミチの体が一瞬ぶれた。

見えない攻撃が、イルディに顎に打ち込まれる。

「がっ」

地面を転がっていくイルディ。

勝負あり、誰もがそう思った。

攻撃を放った本人以外は。

「……どういっつもりかな？」

「ふむ、どういっつもりと聞かれてもな」

むくりと、イルディは起き上がった。

「相手の力量を測るのは戦いの基本だろう？　それが始めて戦う相手とあれば当然のこと」

「つまり、僕は試されたってわけかな？」

「いいや、まだあんたは本気を出していないだろう？　力量を測ったことにはならないさ」

イルディの挑発的な言葉に、タカミチは齒噛みする。

エヴァンジェリンを一度だけとはいえ圧倒した相手に、そんなことを言われては自分の今の一撃は弱いと言われているようなものだった。

「次からは僕も本気だ」

タカミチの姿が消える。

瞬動でイルディの背後に回ったのだ。

タカミチは最速の一撃を放つ。

今度こそ決まっただろう。

タカミチでさえもそう思った。

しかし、

「そんなものではないだろう？」

元悪魔が、耳元でささやいていた。

「くっ」

慌てて、距離を離すタカミチ。

その間、イルディは何もなかった。

「ふむ、皆もそろそろ退屈しているだろうし、次の一撃で決めようじゃないか」

彼がそういうと、右腕に黒い炎をまとった。

「なっ、視認できるほどの魔力を」

「構えろ、タカミチ」

互いに無言。

一陣の風が吹いた。

それを合図にしたかのように二人の姿が消える。

そして、互いに先ほどまで立っていた場所とは逆方向に現れる。

再び無言。

傍目にはどちらが勝ったのか、どちらが負けたのか、判断できずにいた。

「ぐっ」

腹部を押さえて倒れこんだのは――タカミチだった。

「ふう、やはり人間相手では加減が難しいな」

余裕そうに構えているイルディだが、顎をなでていることから痛いのだろうと推測できる。

「何を呆然と見ている。早くタカミチの手当てをしてやれ。それと学園長、これで文句はないだろう?」

イルディの言葉で啞然としていた魔法先生たちがタカミチに駆け寄る。

「ふむ、君の実力も分かったことじゃし、今日はタカミチ君の治療をして解散とするかの」

「では、俺は帰らせてもらっ」

学園長に背を向け、遠目から見ていたエヴァンジェリンたちの下

へと向かう。

「まさかタカミチを圧倒するとはな」

「意識を刈り取られなかったことが幸運だっただけだ。自分が人間の肉体だということを忘れていたからな」

「ですが、マスターの背後を取っただけのことはありました」

「おい、イル。今度は私と戦え」

「残念だが断る」

「何！？ なぜだ？ 私では相手にならないというつもりか？」

今にも噛み付いてきそうなエヴァンジェリンを横目に見つつ、彼女たちの家へと足を向ける。

「そうじゃない」

「ではなぜだ？」

「エヴァは俺の生徒で寝床を提供してくれた恩人でもある。そんな女性を殴ることなんて出来ない」

「魔法を使えばいいだろうが！」

「残念ながら、俺は不器用でね。殴る以外に魔力が使えないんだ」

「何だと？ あれだけの魔力を持っていながら？」

「そうだ。だから、俺に魔法を覚えてくれないか？ エヴァ」

エヴァンジェリンと向き合うイルディ。

彼女は少し考え込むように腕を組む。

「いいだろう。私の特訓は厳しいぞ」

「上等だ。そうでなくては魔法を使えるようになれるとは思ってないさ」

こうして、イルディはエヴァンジェリンに魔法を教わることになった。

第三話 元悪魔と裏の顔合わせ（後書き）

主人公、不器用なのに料理は出来て魔法は使えないってどういうことなの。

第四話 元悪魔と魔法の練習（前書き）

キャラが一部崩壊しています。

第四話 元悪魔と魔法の練習

「ところで、エヴァ」

「ん？ 何だ？」

別荘での魔法の練習中、不意にイルディは口を開いた。
今しているのは杖に火を灯す練習だ。

「噂で聞いたのだがな」

先ほどから数百回と練習しているが、火がつく気配は見られない。
たまについたかと思えば爆発する始末。

「最近、満月の夜に吸血鬼が現れるらしい」

「……それが私だと？」

エヴァンジェリンから表情が消える。

「違うのか？」

「ふん、だとしても貴様には関係のないことだ」

イルディから、彼女は顔を背ける。

「なに、別に咎めるつもりはないさ。ただ確認しただけだ」

そう言って、魔法の練習に戻る。

目を瞑り、火が灯るのをイメージする。

「エヴァ、——俺の血を吸うといい」

目を開いたとき、彼の握る杖には火が灯って——いなかった。

「……本気か？」

「エヴァには世話になってるし、何より困っている生徒を助けるのも教師の仕事なのだろう？」

「だが、人間の肉体の貴様になら、吸血鬼化したり支配下におくことも可能なのだぞ」

「エヴァはしないさ」

意地の悪い笑みを浮かべて、イルディは答える。

「もっとも、俺のような元人外から血を吸うのは気が引けるだろうが……」

「……本当にいいのか？」

「もちろん、二言はない」

短い付き合いだが、イルディが本気だということは見て取れた。

「じゃあ、いくぞ」

「ああ」

エヴァンジェリンの吐息が首筋をくすぐる。

チクリとした痛みが走る。

ゆっくりと、味わうようにエヴァンジェリンの喉が動く。

しばらく経った後、彼女は口を離した。

「すまない、吸いすぎたかもしれん」

「いやなに、これくらい……」

イルディはふらついて、地面に手をついた。

「だ、大丈夫か？」

「ふむ、人間の肉体だということを忘れていた」

「まったく、お前は阿呆だな」

呆れたようにエヴァンジェリンはため息をついた。

「ほら、膝を貸してやる。横になるといい」

「すまない」

エヴァンジェリンの膝に頭を乗せると、イルディはすぐに眠ってしまった。

「……こうしていると、ただの人間のようなんだがな」

元悪魔だから、実際に今はただの人間なのだが。

彼女は微笑みながら、イルディの撫でる。

しばらくして、その様子を眺めていた茶々丸が口を開いた。

「マスターとイルさん、まるで恋人同士ですね」

「なっ、何を言っただ茶々丸！」

「照れたように顔を赤らめるマスター、かわいいです」

「こ、この！ あとでネジを巻いてやる！」

これだけ騒いでもイルディは、起きなかった。

杖に火をつけるだけとはいえ、何百回と魔力を消費し続けたのだから、仕方ないのかもしれない。

彼が起きるのを待つて、エヴァンジェリンたちは別荘を後にした。

第四話 元悪魔と魔法の練習（後書き）

エヴァンジェリンがデレるのが早すぎる気がする。

第五話 元悪魔と期末テスト（前書き）

主人公の行動理念がおかしくなってきた。

第五話 元悪魔と期末テスト

学期末テストで最下位を脱出できれば、ネギは本物の教師となるらしい。

逆に言えば、最下位を脱出できなければ、ネギは教師を辞めなければいけないのだ。

イルディにもそれは当てはまる。

仮にも2・Aの副担任なのだから、彼女たちの成績を上げるのも彼の役割のひとつだった。

今日もいつものように学園に来て、2・Aの教室へと向かう。

「そういえば、ネギ先生の姿が見えないな」

職員室にはネギはいなかった。

「まったく、十歳の子供とはいえ、教師としての職務を全うして欲しいものだな」

愚痴を言いながら、2・Aの戸を開ける。

「どうした、そんなに騒いで」

やけに騒がしいので疑問に思ったイルディは尋ねた。

「ネギ先生とバカレンジャーと木乃香が行方不明に……」

「行方不明？」

「図書館島で頭のよくなる魔法の本を探しに行つて、そのまま……」

早乙女ハルナと宮崎のどかが答える。

どうしようという視線がクラス中から、イルディに向けられる。

「まず状況を整理しようか。なぜ魔法の本を探しに行こうということになったんだ？」

「それは、次の期末で最下位を取ったクラスが解散になるかもしれないという噂を聞いて……」

「ふむ、その噂を最初に口にしたのは？」

「木乃香ですけど……」

「……なるほど」

イルディは考え込むように腕を組んだ。

「学園長に指示を仰いでくる。お前たちは自習していてくれ」

「待ってください！」

「何だ？」

「2 - Aが最下位を脱出できなければネギ先生が辞めさせられると
いうのは本当ですか？」

「本当らしいな。そうならないように勉強することだな」

そう言つて、彼は教室を出て行つた。

——と思つたら戻つてきた。

「桜咲刹那、心配ならお前も一緒に来るか？」

「は？ い、いえ、私は……」

「だったら、そんな顔せずに勉強に専念するんだな。迷子のクラス
メイトは俺に任せろ」

「……はい」

今度こそ、イルディは教室を出て、学園長室へ向かつた。

その途中、すれ違つた新田に事情を話して2 - Aの監視を頼んだ。

「学園長、あんたの仕業だろ」

「ふおっ？ 何のことかの？」

学園長室のドアを開いて早々、イルディは単刀直入に言い放つた。

「近衛木乃香にデマの噂を流し、バカレンジャーに魔法の本を探させる。行方不明になったことで他の生徒たちはあいつらの分も勉強する気になる。行方不明になったやつらも恐らく、勉強漬けにしているんだろっ?」

そこまで言つて、学園長の顔を見る。

「ふおおおお、そこまで分かつていて、どうするつもりかね?」

楽しげに笑う学園長に、イルディは答える。

「正直、ネギ・スプリングフィールドの試練とやらには興味がない。あんたのことだから、行方不明になった連中の心配もない」

「そうじゃ」

「だが、教師として魔法の本とやらに頼ろうとしたことを認めるわけにはいかない。そんなことをすれば、教師の存在意義がなくなるからな」

言いたいことだけ言つて、イルディは学園長室を後にした。

「ふおおおお、彼もだいぶ教師らしくなってきたのう」

学園長室を後にしたイルディは、2 - Aの教室に戻り、行方不明者の安全は確保されていることを告げた。

それを踏まえたうえで、勉強に専念するように言った。

イルディは、その日の授業のネギの代わりに全て終わらせると、一人で図書館島へと向かった。

「ふむ、こちらか」

図書館島の地図を片手に、彼は跳ねるように図書館の中を進んでいく。

しばらく進むと、穴が開いた場所に出た。

「ここから落ちたのか？　つまり、ここを降りなければいけないというわけか」

はあ、とため息をついて、イルディは穴の中へと飛び降りた。

落ちた場所は、水辺だった。

「ほう、こんな場所を用意するとは……、それだけネギ・スプリングフィールドに期待しているというわけか」

感心しつつも、人の気配のする場所へ向かう。

「近衛木乃香、綾瀬夕映、お前たちは何をしているんだ？」

「イ、イルディ先生！？　どうしてここに！？」

そこには、くつろいでいる近衛と綾瀬の姿があった。

「お前たちを探しに来たのだが……、その様子では余計な心配だっ

たと見える」

「先生、心配してきてくれたん？」

「俺じゃない。お前たちのクラスメイトたちだ」

「あ」

「宮崎のどこに限っては泣きそうになっていたぞ」

「のどか……」

「それに、桜咲刹那もお前たちの心配をしていたぞ」

「えっ、せつちゃんが？」

「とにかく、今はここを脱出することを」

「キヤー」

ちょうどその時、女生徒の悲鳴が聞こえた。

「あつちか！」

教師として、生徒が危険な目にあっていると思われるのなら、行かないわけにはいかない。

「ネギ君、助けて！」

佐々木まき絵がほぼ全裸で、ゴーレムのようなものにつかまって

いた。

「ふぉふぉふぁ、ここからはもう出られんぞ。迷宮を歩いて帰ると三日はかかるしのう」

ゴーレムから聞こえてくる声は明らかに学園長のものだった。

「ふむ、悪ふざけが過ぎるな」

「イルディ先生！？ どうしてここに？」

「今はそんなことはどうでもいい。今は脱出することだけを考えろ」

イルディはゴーレムの佐々木を掴んでいる腕を蹴り上げて破壊した。

「

「す、すごい」

「佐々木まき絵をつれて、さっさと脱出口を探せ。その間、ゴーレムは俺が相手をする」

「ですが、魔法の本が」

せっかく見つけた本を放っておくことは出来ないのか、綾瀬がゴーレムの首元にある本を指差す。

「あの本があれば、確かに頭はよくなるのかもしれない。だが、それは今お前たちの帰りを待って、勉強しているクラスメイトたちに

対しての裏切りではないか？」

「……………」

「なに、ここにいる間も勉強していたんだろう？　なら自分を信じてみるのもいいだろう」

「……………わかったです」

しぶしぶといった様子で綾瀬は引き下がった。

「ま、待つのがじゃ」

「おっと、あんたの相手は俺だ」

駆け出した生徒たちを守るように、イルディはゴーレムの前に立ちふさがる。

じりじりとにらみ合いになるゴーレムとイルディ。

「俺の裏に非常口があるです。先生も早く！」

「お前たちは先に行け。俺はこのゴーレムに少し説教をしないとイケないのだな」

さっさに行け、と手を振って生徒たちを逃がす。

「……………わかったです。先生もご無事で」

「生徒を守るのも教師の役割だ」

彼女たちの姿が見えなくなるのを確認すると、彼はゴーレムに向きあった。

「さて、学園長。遺言はあるか？」

イルディの右腕を黒い炎が覆う。

「ちょ、ちよつとま」

「問答無用」

タカミチを悶絶させた一撃がゴーレムの頭を貫いた。

崩れていくゴーレムに背を向け、イルディは出口へと向かう。

残された魔法の本が水面から顔を出していた。

結果から言うと、期末テストは学年トップで2 - Aが勝利した。

それまでにバカレンジャーたちの遅刻や学園長の採点の足し忘れがあったものの、無事、期末テストは終了した。

第五話 元悪魔と期末テスト（後書き）

ヒロインを増やそうとした企みが仇となりそうです。

第六話 元悪魔とネットアイドル（前書き）

千雨の性格がおかしいかもしれません。

第六話 元悪魔とネットアイドル

2 - Aが見事学年トップを取り、ネギは正式な教師として雇われることになる。

3年になっても彼はかわらず3 - Aの担任をすることになるらしい。

それと同時に、副担任であつたイルディも3 - Aの副担任を任されることになった。

「これから、学年トップおめでとうパーティやりませんか？」

そんなクラスメイトの言葉で、パーティを開くことになったのだが――。

「どーしたんですか長谷川さん？」

「いえ、別に。ちょっと、おなかが痛いので帰宅します」

長谷川千雨は乗り気ではないのか、帰宅してしまった。

「あ、長谷川さん！」

黙ってその様子を見ていたイルディが不意に口を開いた。

「……ネギ先生。彼女のことは俺に任せてくれないか？」

「え、イルディさん？」

無言で彼は長谷川の後を追った。

長谷川千雨は苛立っていた。

明らかにおかしい。

10歳の少年が担任になるなど。

副担任の青年のほうはまだマシである。

昔からそうだった。

自分がおかしいと思っていることは、他の人たちは自然と受け入れている。

自分が異常なのか？

そう思うときも多々あった。

それでも自分が正しいと、自分の常識が正しいんだと。

「そうだ。私はおかしくない。おかしいのはあいつらなんだ」

そして今日もネットに自分の画像を上げる。

ネットの世界にいと落ち着くから。

「ふむ、これがお前の秘密か」

「え？」

バニーの格好をしていた千雨を見つめていたのは、副担任のイルデイだった。

「ど、どうしてここに……」

「ノックをしたのだが返事がなかったからな。倒れているのかと思って覗いてみたのだが、心配は無用だったらしい」

返事がないならそのまま帰れよ。

千雨はそう思った。

「……あんたも、私のことを変だと思ったか？」

うつむき加減で千雨は尋ねる。

「どうせ私はクラスの連中とはなじめない異常者だよ！ 部屋に戻っても、こうしてネットの世界に引きこもってる変人だよ！ どうせ私なんて……」

彼女の目から涙がこぼれる。

「私なんて……」

「ふむ」

副担任はどうすればいいか分からないのか、腕を組んだ。

そっだ、このまま放っておいてくれれば……。

「放ってはおけない」

「っ！？ 何だよ！」

心を読んだかのように、彼は言った。

顔を上げると、彼の深い黒の瞳が千雨を見つめていた。

まるで全てを見透かしたような目に、自分の苛立ちは増していた。

「お前は俺の生徒だ。その生徒が悩んでるんだ。相談に乗るのが教師としての役目だ」

「うるさい！ あんたに何が分かるんだよ！」

千雨は思わず手元にあったペンケースを投げつけた。

勢いよく投げられたそれは、見事に副担任の頭に当たった。

「あっ」

しまった、と思った。

「長谷川千雨」

怒られる、そう思って千雨は目をつぶった。

近づいてきた彼は、千雨の頭をくしゃくしゃと撫でた。

「え？」

恐る恐る目を開けると、やさしげに微笑む副担任の姿があった。

「怒らない、のか？」

「生徒の苛立ちも不安も、全部受け止めてやるのも、教師の役目だからな」

——ああ、こいつには敵わない。

千雨の心に、諦めにも似た感情がわく。

しかし、それは今までの黒い感情ではなく、もっとやさしいものだった。

それと共に、自分の頬を伝う涙は増えていた。

千雨が泣き止んだころ。

「もう大丈夫だ」

泣き腫らした目で彼女は告げる。

それを聞いて、彼はそうか、と笑った。

「そうだ。ケーキを食べられる場所に行かないか？」

彼は思いついたように言う。

「ケーキ？」

「女性は甘いものが好きだと聞いたが？」

「まあ、嫌いじゃないけど」

「では、支度をするといい。俺は外で待っている」

「待てよ！」

「ん？」

気づけば千雨は彼を呼び止めていた。

「……私の秘密を知られたんだから、あんたの秘密を教えてくださいよ」

副担任は、きょんとした表情を浮かべ、笑った。

「な、何がおかしいんだよ！」

「別に。それくらいの軽口がたたけるならもう大丈夫そうだな」

むきになった自分が恥ずかしくなった。

「そうだな。俺だけが秘密を知っているというのも不公平だな」

——実は俺、元悪魔なんだ。

耳元でそうささやいて、彼は部屋を出て行った。

「……はは、なんだよそれ」

冗談にもほどがある。

でも、と千雨は思う。

それは本当かもしれない、と。

「騙したな」

「何のことだ？」

「イルディ先生遅い！」

「あ、長谷川さんも来てくれたんですね」

イルディがつれてきたのは2・Aのパーティー会場だった。

「俺はケーキを食べられる場所と言っただけだが」

「ぐ……」

意地悪そうに笑うイルディを2・Aのメンバーが会場に引っ張っていく。

その光景を見ながら、千雨は思っただ。

こんな日が、たまにはあってもいいんじゃないかと。

第六話 元悪魔とネットアイドル（後書き）

最後がいまいちな感じもありますね。

第七話 元悪魔と心の闇（前書き）

今回は少し長いです。

あと、オリジナルキャラが登場します。

第七話 元悪魔と心の闇

時は流れて新学期。

春休みの間、イルディはずっと杖に火を灯す練習をしていた。

しかし、いつまで経っても火はつかない。

エヴァンジェリンには、

「お前、魔法の才能ないんじゃないか？」

茶々丸には、

「大丈夫です。魔法が使えなくても、イルさんはイルさんです」

最近知り合ったチャチャゼロには、

「ケケケ、別ニ魔法ガ使エナクテモ、俺ト戦エルンダカライイジャ
ネエカ」

などといわれる始末。

「はぁ……」

ため息をつきながら、学園に入る。

すると、保健室で人だかりが出来ていた。

「どうした、お前たち」

「あ、先生。実は――」

その後、佐々木まき絵が桜通りで倒れているのを見つけられ
たらしいのを知った。

佐々木を見ていたネギが何かに気づいたようだが、イルディには
まったく興味はなかった。

それ以上に、教師として生徒を守れなかった自分に腹が立った。

その日の夜。

エヴァンジェリンと茶々丸の帰りが遅いので、思い切って聞いて
みることにした。

「エヴァ、佐々木まき絵から血を吸ったな？」

「……そうだが、それがどうかしたのか？」

「いや、それを止められなかったのは俺の責任だ。このことは学園
長も知っているんだろう？」

「ほう、なぜそう思う？」

「エヴァが勝手にやったのなら、ネギ・スプリングフィールドでは
なく、他の魔法先生が介入するだろう。それが無いということは、

学園側が黙認していることに他ならない」

視線で、エヴァンジェリンに確認をとる。

「くくく、よく分かったな。だが、なぜジジイが許可を出したのかは分かるか？」

「……大方、ネギ・スプリングフィールドの戦力強化のためだろう。それがなぜ今なのかは分からないが」

それ以上に、とイルディは付け加える。

「俺の生徒を利用して、ネギ・スプリングフィールドを鍛えようとする考えが気に入らないな」

「それは、私たちも含めてか？」

「当たり前だ。エヴァと茶々丸は俺の生徒であり、家族でもある」

「家族、ですか？」

「これだけ一緒に暮らしてるんだ。家族と言っても差し支えないだろう」

茶々丸の疑問にイルディは答える。

「それで、お前はどつする？」

「俺は……状況次第だな。他の生徒が危険な目に遭っていたら、エヴァが相手でも止める。エヴァたちが危険な目に遭ってたら、エヴァ

「アたちを助ける」

「そうか。そのほうがお前らしいがな。だが、ネギ・スプリングフィールドのことはいいのか？」

「あいつがどうかしたのか？」

「私の封印をとくためには、やつの血が大量に必要なんだよ」

ようやく合点がいったのか、イルディは頷いた。

「別にあいつがどうなろうと知ったことじゃない。あいつは同僚ではあるが、生徒じゃないからな」

「……案外、冷酷なのですね」

「必要以上の仕事はしない主義なんだ」

結局、その日のことは不問ということになった。

数日後、イルディは学園長のところを訪れていた。

「おい、どういふつもりだ？」

「ふぉ！？ 何のことかのか？」

「とばけるな。ネギ・スプリングフィールドに助言者がついたらしいな」

「そ、そうなのかの？」

「この学園の結界のことはあんたが一番詳しいだろうが！」

机に拳をたたきつけるイルディ。

「ひっ」

「仮にも学園長ともあるつものが、よりもよって俺の生徒を——」

「ど、どうしたのじゃ？」

「この感覚は……。話はまた今度だ！」

イルディは慌てたように学園長室を飛び出していった。

「なんだったんじゃ？」

首をかしげる学園長だったが、予定通りエヴァンジェリンを呼び出すことにした。

——くくく、いい人間が見つかった。

「え？ カモ君、何か言った？」

「いや、俺っちは何も」

「じゃあ、アスナさん？」

「私も何も言っていないわよ」

「それよりも、茶々丸って奴が行っちゃいます」

ネギとアスナ、それにカモミールは茶々丸を尾行していた。

だが、その先々で茶々丸の人の良さをアピールされ、計画を断念しようかと思つたその時。

「兄貴、姐さん。迷つてる暇はありませんぜ。ここであの従者を仕留めなきゃ、さらに被害が出るかもしれないんですぜ」

「だ、だけどカモ君」

「悪を挫き、人を助けるのが『立派な魔法使い』なんじゃねえんですか？」

ネギは思つた。

否、思つてしまった。

茶々丸を倒したほうがいいと。

—— だったら殺っちゃおうぜ。

そんな声がした。

「分かつたよカモ君」

「ネギ？」

アスナが心配そうにネギを見るが、ネギの目に彼女の姿は既に映っていないかった。

「茶々丸さんを倒そう」

「油断しました。でも、相手はします」

茶々丸は二人の存在に気づいた。

「茶々丸さん。僕を狙うのはやめてもらえませんか？」

「申し訳ありません。ネギ先生。私にとってマスターの命令は絶対です。」

だが、それはネギにとって想定範囲の答えだったのか、特に動揺した風もなく答えた。

「仕方ないですね。では、茶々丸さん」

「はい。神楽坂明日菜さん。いいパートナーを見つけましたね」

ネギは杖を構え、アスナも戦うために構えをとる。

「行きます！ 契約執行十秒間！ ネギの従者『神楽坂明日菜』！」

アスナが茶々丸に迫ってくる。

茶々丸がデコピンをしようとした手をアスナが振り払う。

逆にアスナがデコピンしようとした腕を茶々丸が防ぐ。

「はい！ とても素人とは思えない動き——ッ!？」

ネギが詠唱していることに気づき、茶々丸はアスナの足を払って距離を取ろうとする。

「魔法の射手 連弾・光の十一矢!」

それより早く、ネギの魔法は発動した。

「追尾型魔法、至近弾多数！ よけません。すいません、マスタ―、イルさん。もし私が動かなくなったらネコのエサを……」

「馬鹿、そんなことを言える暇があつたら生きのことを考えろ!」

「えっ?」

茶々丸を襲った衝撃は、想定以下のものだった。

誰かに突き飛ばされたのだ。

「えっ、そんな!？」

アスナの驚いた声が聞こえる。

だが、茶々丸にとって、そんなことはどうでもよかった。

「イル、さん……」

そこには、ぼろぼろの姿のイルデイがいた。

「くっ、魔力を全身にまとしてこのザマか」

彼はキツとネギを睨みつけた。

「ネギ・スプリングフィールドに憑いている貴様は何者だ！」

イルデイはネギではなく、その中にいるものに語りかけた。

「くくく、よく分かったな」

「え、ネギ？」

「兄貴？」

「ネギ先生？」

当事者以外が、疑問の声を上げる。

「やはり、俺と共に結界を抜けてきたわけか」

「そうだ」

スツとネギの中から一人の男が現れた。

「お前と同時にこの結界を抜けたことで、他の連中に気づかれずに

済んだ」

「え、あれ、僕……」

意識が戻ったネギが、何がなんだか分からないといった様子であったりを見渡す。

「貴様、何が目的だ？」

「目的？ 知れたこと、我々の目的は宿主の闇を手助けするだけ。つまり、貴様が助けたその女を殺そうとする意思是元々この小僧にあったということだ」

「ち、ちが、僕は……」

「違うないさ！ 君の願いを叶えてやったんだ私は！」

狂気に満ちた笑いを浮かべる男。

その場にいた誰もが動けずにいた。

——そう、彼以外は。

「言いたいことはそれだけか？」

「あ？」

「人の心の闇を利用し、あまつさえ俺の生徒を、家族を死なせようとした。その罪、万死に値する！」

漆黒の炎がイルディの体を包んだ。

「ほう、私と殺るってのか？」

男の体にも、紫の炎がまとわれる。

「それは違うな。これは断罪だ」

「面白い、貴様ごときが私を断罪するだど？」

彼らの姿は消えた。

直後、彼らは激突した。

「はあああああッ！」

「せえええええいッ！」

拳と拳。

魔力と魔力のぶつかり合い。

その光景に、ネギたちは目を離せずに見ていた。

「イルさん！」

茶々丸が叫ぶ。

それに反応するかのように、イルディの炎が一段と大きくなる。

「な、なに!？」

驚いた男の声。

二人の姿は光で眩まされた。

光が晴れたとき、立っていたのは――。

「俺の、勝ちだ」

イルディだった。

「くくく、これで勝った気にならないほうがいい」

「何? どういう意味だ?」

その言葉を残し、男は息絶えた。

男の体が霧状になって消えていく。

「終わったか」

「イルさん、今のは一体?」

「あれは悪魔。人間に取り憑き心の闇を暴走させる、質の悪いやつだ」

茶々丸の問いに答えたイルディは、ネギに近寄る。

「あ、イルディさん、ありがとうございます」

「ネギ・スプリングフィールド、貴様もあの悪魔と同じだ」

「えっ？」

「何でネギがあいつと同じなのよ！」

アスナがネギをかばうようにして立つ。

「何故、だと？ あいつも言っていただろうが！ 茶々丸を攻撃する意思是ネギ・スプリングフィールド自身にあった。そうでなければ、俺があれほどまでにダメージを受けるはずが無い」

「ぼ、僕は……」

「お前は、自分の生徒を自分の意思で殺そうとしていたんだよ。それが無意識であったとしても、今回の件はお前自身がもたらしたことだと覚えておけ」

イルディは言い放つと、ネギたちに背を向ける。

「行こう、茶々丸」

「……はい」

残されたネギたちは、呆然と立ち尽くすしかなかった。

「ただいま」

「お帰り、遅かったじゃないか」

家に着くと、エヴァンジェリンは既に帰ってきていた。

「というか、お前は何故そんなにもぼろぼろなんだ！」

「……いろいろあったんだよ。茶々丸、俺は晩飯要らないから」

それだけ言うと、イルディはその場に倒れこんだ。

「おい、大丈夫か!？」

「気絶しているだけだと思われます」

茶々丸は、イルディを担いで部屋のベッドに寝かせた。

「で、茶々丸。一体何があったんだ？」

「実は――」

今日の出来事を茶々丸は話した。

ネギに悪魔が憑依していたこと。

それにより、茶々丸をかばってイルディが魔法を受けたこと。

ネギに憑いていた悪魔をイルディが倒したこと。

「なるほどな、そんなことが……」

「どうでしょう」

「ふん、決まっている。当初の目的どおり、ネギ・スプリングフィールドから血をもらう。イルが倒れたのも、あの坊やに原因があるようだ。自分の意思ではないとはいえ、私の家族を傷つけたことを後悔させてやる」

エヴァンジェリンはイルデイのことを家族だと認めた。

彼女は彼に惹かれているのかもしれないと、思った。

第七話 元悪魔と心の闇（後書き）

なんだか変な感じになってきましたね。

これからオリジナル悪魔が登場する予定です。

第八話 元悪魔と表舞台の者たち（前書き）

今回は少し短めです。

ネギとエヴァンジェリンの戦いです。

第八話 元悪魔と表舞台の者たち

茶々丸が襲撃を受けてから数日が経過した。

その間、イルディは眠ったままだった。

エヴァンジェリンは年に二回のメンテナンスの日にネギと戦うことにした。

当初の予定では、クラスメイトたちを操って戦わせるという計画だったが、それを知ればイルディが怒るだろうと思い、正面から戦うことにした。

そのために、エヴァンジェリンはネギを手紙で呼び出していた。

「ネギ先生は来るでしょうか？」

「来るだろうよ。あの坊やなら」

内容は、ネギが勝てばもう生徒は襲わないし、ネギの血も要求しないと書いておいた。

正義感の強い彼ならば必ず来るだろうと、エヴァンジェリンは考えていた。

「エヴァンジェリンさん！」

「ほう、逃げずにやってきたことは誉めてやる。だが、パートナーを連れてきたのは予想外だったぞ」

イルディを傷つけたことで、他の人間には被害を加えさせないために、一人で来るとエヴァンジェリンは思っていた。

「何言ってるのよ！　これで2対2で正々堂々勝負でしょ」

「確かに。正々堂々戦うと言ったのは私の方からだったからな」

「それで、イルディ先生は無事なんですか？」

イルディは眠ったままのため、学校を休んでいた。

他の教師陣には風邪で寝込んでいるということにしてある。

本当のことを知っているのはここにいる4人だけだった。

「今更罪悪感を抱いたか？　それともあれは自分の責任ではないと言うつもりか？」

「僕が茶々丸さんを襲って、イルディさんを傷つけてしまったことは事実です。だから、僕はその事実から目を逸らすつもりはありません。ただ純粹に謝りたいんです」

「ほう……」

このくらいの年齢ならば、事実から目を背け、他人に責任を擦り付けるかとも思っていたが……。

「言葉では何とでも言える！　それにな、私は怒っているんだ。家族を傷つけた罪は重いぞ」

「僕もただやられるわけにはいきません。これ以上あなたに生徒を襲わせるわけには行きませんから」

にらみ合いになる両者。

「いきます!」

最初に動いたのはネギだった。

アスナに契約執行をかけ送り出す。

それに対するかのように茶々丸も駆け出す。

従者に時間を稼がせ、エヴァンジェリンとネギは詠唱を開始する。

「魔法の射手 氷の17矢!」

「魔法の射手 連弾・雷の17矢!」

互いの魔法は衝突し、爆風を引き起こす。

「はは、雷も使えるとは。だが、詠唱に時間がかかりすぎだぞ」

連続して繰り返される攻防。

次第にエヴァンジェリンは強力な魔法へと攻め手を変えていく。

「来るがいい。坊や!」

お互いに同種の呪文を唱える。

「雷の暴風！」

「闇の吹雪！」

エヴァンジェリンの方がやや有利かと思われた。

「ハックシユン！」

ネギのくしゃみで魔法の威力が増した。

その結果、エヴァンジェリンは打ち負けた。

「流石はやつの息子だ。だが坊や、まだ決着はついてないぞ」

とつさにレジストしたので服は脱げたものの、無傷である。

その時、茶々丸が気づいたように叫ぶ。

「いけないマスター！ 戻って！」

予想よりも電源の復旧が早かったのだ。

宙に浮かぶエヴァンジェリンは、川へと真っ逆さまに落ちていく。

ああ、と彼女は思う。

痛みには慣れている。

これまで、何度も経験してきた。

前を見ればサウザンドマスターの息子が飛び出そうとしている。

だが、間に合わないだろう。

茶々丸もエヴァンジェリンを助けようとしているが、彼女のほうもまだ遠い。

エヴァンジェリンは目を瞑る。

だが、ふわりと彼女を抱く影があった。

「酷い格好だな」

意地の悪い顔をして、彼はエヴァンジェリンを抱えていた。

「……イル？」

「何だ？」

「目が、覚めたのか」

「ああ。ただの魔力の使いすぎだからな」

それだけ、イルディの魔力を消費させた先日の悪魔は、すさまじいものだったのだろう。

「負けたんだな」

「……そうだな」

橋に降り立つと、イルディはエヴァンジェリンに上着を着せる。

向こうから茶々丸とネギたちが駆け寄ってきていた。

「マスターご無事ですか!？」

「エヴァンジェリンさん、大丈夫ですか!？」

「何故、坊やが私の心配をする?」

「……僕、分かったんです。イルディさんの言葉で」

「俺の?」

「はい」

そういつと、ネギは目を閉じる。

そして、開いたとき、今までとは違う光を宿していた。

「あなたは僕の生徒で、僕はあなたの先生です。それ以上に理由なんて要らないんだって」

こうして、エヴァンジェリンとネギの戦いは幕を閉じた。

第八話 元悪魔と表舞台の者たち（後書き）

相変わらずの最後がいまいちな件について。
次回ぐらいから修学旅行編に入ろっかと思っています。

第九話 元悪魔と修学旅行一日目（前書き）

またもやオリキャラ出現。

第九話 元悪魔と修学旅行一日目

「京都だ」

エヴァンジェリンがネギに告げた言葉。

ナギ・スプリングフィールド——サウザンドマスターの手がかりがそこにあるという。

都合よく、今の修学旅行の行き先は京都らしい。

イルディは学園長に呼び出されていた。

「それで、俺にネギ・スプリングフィールドの手助けをしろ、と？」

「そうなんじゃ。頼まれてくれんかの？」

「断る」

即答だった。

「ど、どうしてじゃ？」

「ネギ・スプリングフィールドは俺の生徒じゃない。よって、助ける範囲に当てはまらない。俺が助けるのは生徒だけと決めているからな」

だが、と彼は続ける。

「もし俺の生徒に危険が及ぶようであれば、すぐに対処する」

「ふおおおお、それだけで十分じゃよ。それと、木乃香に魔法のことはばれておらんじゃろうな？」

「それをあんたが言うか。ネギ・スプリングフィールドと同室にしているのはあんただろうに」

「わしはいいんじゃないが、木乃香の親が普通の生活をさせたいと言っておつてな」

「危険な世界に足を踏み入れさせたくないということか。善処しよう」

学園長室を出ていこうとして、イルディは振り返った。

「そういえば、エヴァは修学旅行にいけないのか？」

「……残念ながら、この15年間エヴァが修学旅行に参加したことはないんじゃないよ」

「厄介な呪いだな」

参加できないエヴァンジェリンや彼女のために参加しないであろう茶々丸に、土産でも買ってこようと思えるイルディだった。

修学旅行初日。

それは子供の悪戯ととれる嫌がらせによって幕を開けた。

新幹線の中ではカエル騒動。

その際、ネギが親書を奪われるが、桜咲の手によって取り戻される。

地主神社の恋占いの石では、落とし穴とその中にカエルが仕込まれていた。

音羽の滝では、水の代わりに酒が流されていて、生徒が酔ってしまった。

それを他の先生たちに見つからず、バスに押し込んだネギたちの手腕は見事と言えるだろう。

その間、イルディが何をしていたかと言うと、何もしていなかった。

彼の頭の中では、生徒の危機というほどではなかったのだ。

「桜咲刹那もいるし、この程度なら大丈夫だろう」

そう高をくくったのがまずかったのだろう。

その日の夜。

『イルディ先生、このかお嬢様がさらわれました』

携帯電話から聞こえてきた刹那の声に、思わずイルディは舌打ち

した。

『敵は恐らく駅に向かっていているかと――』

最後まで聞かず、彼は宿を飛び出した。

――平和ボケしていた。

そう思わずにいらなかった。

一方その頃。

刹那とアスナ、ネギは木乃香をさらった女と対峙していた。

「よーここまで追ってこれましたな」

女は三枚目の呪符を発動させようとする。

「させるかつ」

刹那が女との距離を一気につめようとする。

が、遅い。

「三枚符術京都大文字焼き！」

勢いを殺せずに刹那は炎に突っ込む――寸前でアスナに首元を掴まれた。

「ホホホ、並みの術者ではその炎は越えられませんえ。ほな、さいなら」

ここまでか。

刹那はあきらめそうになる。

「風花・風塵乱舞！」

ネギの魔法が炎を吹き飛ばした。

「逃がしませんよ。このかさんは僕の生徒で、大事な友達です」

ネギの契約執行により、アスナが光を纏う。

そして、アスナはアーティファクトを手にしたのだが、その実態は。

「何これ、ただのハリセンじゃないの！」

そう、ハリセンであつた。

「もう、こうなりややけよ！」

アスナは女に向かってハリセンをたたきつけようとする。

刹那もそれと同時に女に向かう。

「何これ？ 動いた!？」

「さっき言った呪符使いの善鬼護鬼です！」

彼女たちの攻撃は、その二体の式によって防がれた。

「間抜けなのは外見だけです。気をつけて、神楽坂さん」

その間にも、女は逃げようとしている。

「このか、このっ！」

「なっ!？」

女の驚いたような声。

それも当然だろう。

たかが中学生に自分の式が消されたのだから。

「あ、あれ？」

本人であるアスナはなぜか分からず戸惑いの声を上げていた。

「よく分かんないけど、そのクマは任せてこのかを！」

「すみません、お願いします」

アスナは刹那の戦っていた式を引き受ける。

刹那は女に向かって飛び掛る。

「このかお嬢様を返せ！」

「えーい」

間延びした声と共に、刹那は弾き飛ばされた。

だがそれだけで刹那は理解した。

——この剣筋、まさか神鳴流！？

「あいたた。すみません、遅刻してしもて」

メガネをかけ、フリルのついた服装に身を包んだ少女は、微笑みながら名乗りを上げる。

「どうもー、神鳴流ですー、おはつにー」

「え、お、お前が神鳴流剣士？」

「はいー、月詠います」

のんびりとした口調で月詠は答える。

「……こんなのが神鳴流とは、時代も変わったな」

そう言いつつ、刹那は間合いを計る。

見た目だけで力量を判断することはない。

「ふ、甘く見ると怪我しますえ。ほなよろしゅう、月詠はん」

ぺこりと頭を下げる月詠。

「ではいきます。ひとつお手柔らかに——」

言葉もそこそこに、月詠は刹那との間合いを詰めてきた。

「むっ」

「えーい、やあ、たあ、とぉー」

間延びした声とは裏腹に、月詠の二刀によって行われる攻撃は、常人では捕らえられないほどの速度だった。

「くっ」

連撃を何とか弾いて回避する。

リーチの長さは野太刀の良さだが、相手の月詠は手数で攻めてくる。

その隙に、女が木乃香を抱えて逃げようとする。

「風の精霊１１人！ 縛鎖となりて敵を捕まえろ！」

「ああつ、しまった！？ ガキを忘れてた！」

「もう遅いです。魔法の射手・戒めの風矢！」

勝ち誇ったようにネギが魔法を唱えた。

「あひいつ、お助け——」

「あつ、曲がれ！」

女は木乃香を盾にして、魔法から自分のみを守ろうとした。

結果、魔法は誰にも当たらなかった。

「なるほど、読めましたえ。甘ちゃんやな……人質が多少怪我するくらい気にせず打ち抜けばえーのに」

勝ち誇ったように笑う女。

「この調子で、この後も利用させてもらっわ」

「こ、このかをどうするつもりなのよ」

「せやな、まずは呪薬と呪符でも使って口を利けんようにして、上手いことうちの言うことを聞く操り人形にするのがえーな。くっくくっく」

笑い続ける女の声を遮るように、その男は現れた。

「……俺の生徒を、返してもらおうか」

世界は凍りついた。

イルディは怒りに燃えていた。

それは木乃香を守れなかった自分への怒りでもあり、木乃香を攫っていったやつへの怒りでもある。

彼が現れた時、その場にいた人間は誰一人動けずにいた。

「女、選ばせてやろう。おとなしく近衛木乃香を返すか、この場で死ぬかだ」

イルディの放つ殺気は、この場にいた誰もが感じたことの無いものだった。

ゆっくりと、しかし確実にイルディは女に近づく。

「ひっ、っ、月詠はん！」

「え、えーい」

殺気を振り切ったのか、それとも恐怖ゆえの行動か。

だが、イルディは切りかかってきた月詠の背後を取っていた。

「え？」

「邪魔だ、失せろ」

蹴り飛ばされた月詠は、壁に激突し動かなくなった。

「さて、残るは貴様だけだ」

「い、いやや、死にとうない！　そ、それ以上近づいたら、お嬢様を――」

「どうするって？」

「ひっ！？」

耳元で声がしたかと思うと、女は顔面を殴られていた。

「がっ！？」

殴り飛ばされた女に追撃をかけるべく、接近したイルディの拳は――。

「おっと、そこまでしておきましようか」

突然現れた少年によって止められた。

「遅いで新入り！」

「すみません。遅くなりました千草さん」

新入りと呼ばれた少年は、悪びれた風も無く笑う。

「そんなことより」

少年が千草と呼ばれた女に手をかざすと、彼女の顔はイルディに殴られる前に戻った。

「女性はきれいなままが一番ですよ」

「な、何を言うてるんや？」

「さて——」

千草の言葉を遮るように、少年はイルディの前に立つ。

「お嬢様は返すので、今回は見逃していただけないでしょうか？」

「……どういうつもりだ？」

「僕たちの負け、ということですよ」

——今回は。

「逃がすと思っているのか？」

「勝てると思っているんですか？」

イルディと少年は睨み合う。

「今のあなたじゃ僕には勝てない。平和ボケしてしまったあなたじゃね」

「……貴様」

「では、失礼させていただきます」

少年が指を鳴らすと、少年と千草、月詠は影に飲まれていった。
それを見届けると、イルディは横になっている木乃香に駆け寄った。

「近衛木乃香、無事か？」

「お嬢様！」

イルディより早く、刹那が木乃香の無事を確認する。

「よかった。せつちゃん、うちのこと嫌ってるわけやなかったんやな」

「えっ、そ、そりや私かて、このちゃんと話し……」

思わず地が出てしまったのだろう。

「し、失礼しました！」

刹那はあわてて飛びのき、頭を下げた。

「わ、私はこのちゃ……お嬢様をお守りできればそれだけで幸せ。いやそれも、ひっそりと陰からお支えできればそれで……あの……御免！」

刹那は逃げるように駆け出していった。

「やれやれ、困ったものだな」

教師として、彼女たちの距離は修正すべきものだった。

何とかできないものかと考えていると。

「桜咲さん！」

アスナが大声で刹那に向かって叫んでいた。

「明日の班行動、一緒に奈良回ろうね。約束だよ！」

刹那はきょとんとしてアスナを見ていたが、その後に黙って走っていつてしまった。

こうして、修学旅行初日は終わる。

残りは4日。

その先に待つものが何なのか。

今の彼らは何も知らない。

第九話 元悪魔と修学旅行一日目（後書き）

生徒以外はどうでもいいのか主人公。
そのうち主人公の過去話でも作りますかね。

第十話 元悪魔と修学旅行二日目（前書き）

前回のオリキャラが出ます。

第十話 元悪魔と修学旅行二日目

戦闘があつた次の日。

敵の気配は無く、絶好の修学旅行日和となつた。

ネギはのどかたちと奈良を散策することになり、イルディは単独で行動することにした。

本来であれば、敵の狙いである木乃香を守るのが最優先であるが、教師がひとつの班に集中してしまうのもおかしいことになるのでやめた。

ネギのことは誘う生徒だったが、イルディには誰も誘いに来なかった。

昨日のことがあつて、殺気立っていた彼を避けていたというものもあるのだが、それを知らないイルディは少しだけ落ち込んだ。

「また会いましたね」

奈良公園に着くと、イルディは少年の声に振り返った。

「貴様は」

「ここにいましたよ」

昨日出会った赤髪の少年が立っていた。

「何の用だ？」

身構えるイルディ。

それに対して、少年は苦笑して手を振る。

「嫌だな。そんなに警戒しないでくださいよ。元は同じ悪魔じゃないですか」

「ッ！ やはり貴様は」

「はい、傲慢を司る悪魔、ベリアルと申します。以後お見知りおきを」

「七つの大罪が、何故あんなやつらに手を貸している？」

「勘違いしているようですが、僕は彼女たちの仲間ではありません」

「何？」

「利害が一致しているだけの関係ですよ」

そんなことより、とベリアルはある方向を指差す。

そこには、ネギとのどかが二人でいるところだった。

「微笑ましいですね。彼女は彼のことが好きなようです」

「その、ようだな」

「あなたに彼女たちの笑顔を守る資格があると思いますか？」

「守って見せるさ。たとえ、どんな手段を使っても」

「ふふ、そうですね」

ベリアルは空を見上げ、腕を伸ばす。

「では、あなたによいお知らせを伝えておきましょう。今日一日、我々はお嬢様を奪いには来ません」

「それを教えてどうする？」

「せっかくの修学旅行です。思いっきり楽しんでみるのもいいのでは？」

「……ふん、余計なお世話だ」

「それでは、またお会いしましょう」

ベリアルは影に溶けるように消えてしまった。

「私、ネギ先生のこと大好きです！」

のどかの声をバックに、イルディはため息をついた。

「ええっ、魔法がバレた！？ しかもあの朝倉に！？」

アスナの大声で、イルディは何事だとネギたちの元へと駆け寄った。

「どうかしたのか？」

「あ、イルディさん。実は――」

ネギから事情を聞いたイルディは、腕を組んだ。

「残念ながら、俺に出来ることはないな」

「そ、そんなあ……」

「おーい、ネギ先生」

そこへ噂の人物朝倉和美がやってきた。

朝倉が言うには、カモミールの熱い説得に応じて、ネギの秘密を守るエージェントとして協力すると言う。

「朝倉和美」

黙ってそれを聞いていたイルディは、不意に朝倉を呼び止めた。

「何ですか？」

「こちらへ関わるということは、最悪、命の危険があるということだ。それは理解しているか？」

「え、命の危険？」

訳が分からない様子で、朝倉はカモミールを見る。

当のカモミールも、よく分からないといった顔をしている。

「これは神楽坂アスナと桜咲刹那、お前たちにも言えることだ。正直、教師としてお前たちがこちら側へ関わることは喜ばしくない。第一、覚悟も出来てないような――」

「覚悟ならあります」

イルディを見返すように、刹那は言う。

「それはどんな覚悟だ？」

「お嬢様のためなら、この命を懸けることができます」

「……駄目だな」

「えっ？」

「それでは近衛木乃香の体は守れても、心までは守れない。お前のことを大切に思っている彼女なら、お前が死んだら確実に悲しむ」

「それは……」

「だから、な」

ほんと、イルディは刹那の頭に手を乗せる。

「軽々しく命を懸けるな。それに、いざというときは俺が助けてやる。だから、どんな状況でも、生きること考える」

「……………」

刹那は黙ってうつむいている。

「もちろん、お前たちもだぞ。あまり無茶はしないようにな」

朝倉とアスナの顔を眺めて、イルディは部屋に戻っていった。

「……………あなたに、何が分かるというんですか」

誰にも聞こえないように、刹那が呟いているのを知らずに。

『修学旅行特別企画！ くちびる争奪！ 修学旅行でネギ先生、イルディ先生とラブラブキッス大作戦！』

朝倉とカモミールが考えたこの企画。

旅館の四方に描かれた魔法陣よって、旅館内でキスすると即仮契約が成立するというものだ。

それを知らない生徒とネギ。

「ネギ先生とキス……………」

ネギとのキスに熱意を表す生徒たち。

生徒たちから信頼されているものの、イルディは何故かキスの対象としては見られていなかった。

どたばたしたまま『ラブラブキッス大作戦』は幕を開けた。

イルディはというと、部屋で不穏な気配を察知していた。

「やれやれ、これは生徒のものか？ 一体何を考えているんだ？」

彼は新田が監視しているであろうロビーに向かった。

そこでは、千雨と明石の二人が正座していた。

「新田先生、何の騒ぎですか？」

「イルディ先生。実は――」

イルディは新田から、この二人が勝手に部屋を出ていたことを聞いた。

「なるほど、他の生徒も出歩いているかもしれませんね。俺も見回ることにします」

「それは頼もしい。出歩いている生徒を見つけたら、ここに連れてきてください」

「分かりました」

イルディはこの空気が、契約関係のものであると理解していた。
元悪魔とはいえ、契約に関しては理解はあるつもりだった。

「だが、これだけ巨大な範囲を見ると、無差別か？」

無差別に契約を行う必要性がわからないが――。

「こんなことをするのはカモミールか？」

イルディは、とにかく生徒を早く見つけることにした。

ネギの部屋では、綾瀬がキスされる寸前であった。

――だ、だめです。

綾瀬がそう思っていたときである。

「偽者は消えてもらおうか」

「えっ？」

目を開けると、ネギの姿は煙と共に消えていた。

「大丈夫か？ 綾瀬夕映」

「え、イルディ先生？」

「変なことされなかったか？」

消えたネギの代わりに、イルディが呆れたように立っていた。

「ネギ先生は？」

「あれは偽者だった」

「偽者？」

「どういう原理かは知らないが、紙でできた偽者だったよ」

そういつて、彼は人型の紙を見せてくる。

「今は見逃すから、部屋に戻っている」

それだけ言うと、イルディは部屋を出て行った。

「助けて、くれたですか？」

綾瀬が呟くものの、彼はそこにはいない。

「はっ、こんなことをしている場合ではありません。のどか、起きるです」

綾瀬はのどかを起こして、本物のネギを探しに向かった。

偽者のネギで混乱が起きている頃。

本物のネギが旅館に戻ってきた。

それと対面したのはのどかだった。

「お友達からはじめませんか？」

ネギのその言葉に虚をつかれたようなのどかだったが、いい笑顔で「はいっ」と返事をした。

戻る途中、夕映がのどかの足を引っ掛けて、ネギとキスさせた。

それをテレビで見っていた3-Aの生徒たちは大いに盛り上がったという。

「よおっしゃー、宮崎のどか仮契約カードゲットだぜ！」

「よっしゃ、ずらかるよ、カモっち」

「——やはり、お前たちか」

「えっ？」

部屋の前には腕を組んで待ち構えているイルディの姿があった。

「イルディ先生？」

「話は明日の朝聞こう。今は、ロビーで正座だ」

「そ、そんなー!？」

こうして、修学旅行二日目の夜は終わる。

第十話 元悪魔と修学旅行二日目（後書き）

主人公は仮契約させませんでした。

彼は元悪魔なので契約関係の魔力に敏感なため、理解しているときは仮契約させません。

第十一話 元悪魔と修学旅行終盤（前書き）

正直描写が適当すぎる。

第十一話 元悪魔と修学旅行終盤

「どうするのよ、ネギ！　こんなにいっぱいカード作っちゃって、一体どう責任取るつもりなのよ！」

「僕ですか！？」

「まあまあ、姐さん」

「そーだよアスナ、儲かったってことでいいじゃん」

「朝倉とエロガモは黙ってて！」

昨夜のラブラブキッス大作戦の件で、アスナはネギたちに説教していた。

その間、黙ってイルディはその様子を見ていた。

いつものようにひょうひょうとしていたようにも見えるが、明らかに怒っているのが見てとれる。

アスナの話が終わった後、彼は口を開いた。

「さて、オコジヨ。弁解を聞こうか」

「だ、旦那？」

蛇ににらまれた蛙のように動けなくなるカモミール。

「朝倉和美、お前は昨日俺が言ったことを理解していなかったようだな」

「え？」

「一般人がこちらへ足を踏み入れれば、命の危険がある。お前はクラスメイトを危険なところへ連れ出してしまったんだよ」

「あ……」

「そのことを忘れないようにな」

「……………」

朝倉はうつむいたままだった。

「さて、今日の予定だが——」

ネギとアスナが親書を届け、刹那が木乃香の護衛につくことになった。

イルディは、一人で他のクラスメイトたちを守ることにした。

初日のように妨害工作が無いとはいい切れないからだ。

『イルディ先生、シネマ村に来てください』

「どうした、敵襲か？」

『はい、それが——』

刹那から事情を聞いたイルディは急いでシネマ村に向かっていた。

「なるほど、敵もなかなか考えるじゃないか」

白昼堂々戦うには打ってつけというわけだ。

イルディが現場に着いたとき、既に戦いは始まっていた。

刹那と月詠が対峙し、ネギと木乃香は弓に射狙われていた。

「おっと、あなたはここで足止めさせてもらっよ」

「貴様……」

目の前に赤髪の少年——ベリアルが立っていた。

「邪魔だ！」

「おっと」

一気に距離をつめ、殴りかかったイルディ。

しかし、相手も悪魔を名乗るだけのことはあり、常人では目視できないそれを身をそらすことで回避する。

「ちっ」

イルディはいったん距離を離す。

「せつちゃん!」

「何!？」

刹那が矢を食らい、屋根から落ちるところだった。

「あの馬鹿!」

自分の力量の無さに歯噛みしながら、イルディは駆けつけようとする。

「だから、あなたには行かせないよ。そこで大切な生徒が死ぬのを見ているといい」

「そんなわけに、いくか!」

ベリアルに突っ込もうとしたその時、光が見えた。

「あれは、近衛木乃香か？」

「へえ、あれが彼女の力か」

イルディは木乃香に力を使わしてしまったことを後悔し、ベリアルは彼女の力に驚嘆した。

「……どういふつもりだ？」

ベリアルはイルディに道をあけていた。

「ここでの僕の仕事は終わり、というわけですよ。それに、今夜もしかたならもつと面白いものが見れるかもしれませんよ」

「どついう意味だ？」

意味深な言葉を残し、ベリアルのは姿は消えた。

だが、今はとにかく刹那たちと合流するのが最優先。

イルディは、木乃香を抱えてシネマ村を後にした刹那を追って、その場を離れた。

関西呪術協会の本山に着いて、木乃香の父親が長を務めていると、いうことがわかった。

本山の結界は強力なものらしいが、念には念を入れたほうがいいだろうとイルディは忠告することにした。

「あんたが近衛木乃香の父親か？」

「はい、近衛詠春といいます。イルディ・ヘレティック先生」

「なるほど。こちらのことは既に知っているわけか」

「それで話とは？」

「俺は一度生徒たちの待っている宿に戻る。その間、ここに残る生

「徒たちの安全を頼みたい」

「彼女たちがまた行動を起こすと言つのですか？」

「ああ」

イルディは頷いた。

「やつらに荷担している悪魔が言っていた。今夜、面白いものが見れると」

「悪魔!？」

「やつは俺以上の力の持ち主で、頭も切れる」

「分かりました。警戒を怠らないようにします」

「よろしく頼む。俺は宿にいる生徒たちに危害が加わらないようにする」

挨拶もそこそこに、イルディは3-Aの生徒たちがいる宿に戻った。

その判断がどんな結果をもたらすかも知らずに。

「こら新入り! あんたが追わんでえーゆーから放つといたら本山に入られて手出しできんやんか! 親書も渡つてしもたし!」

本山の外から見ていた千草がヒステリックに言う。

「大丈夫ですよ。僕に、任せてください」

新入りと呼ばれた白髪の少年が答える。

「んー、じゃあ、僕も行きますかね」

反対側にいた赤髪の少年——ベリアルは笑う。

「僕だけじゃ心配かい？」

「いやいや、心配というよりその逆ですね。やり過ぎないか見に行
くだけです」

二人は見つめあい、互いに姿を消した。

「な、何なんや、あの新入りたちは」

疑問を口にする千草だけが残った。

「くっ、戦力を分散させたのが仇になったか」

綾瀬からの連絡で、イルディたちはネギたちの救援に向かっていた。
た。

自分がついていれば。

そんなことを考える。

「うぬばれないことだよ、イルディ先生」

「龍宮真名……」

「一人に出来ることなんて限られてる。自分一人で生徒を守れるとは思わないことだ」

イルディは龍宮に説教された。

これが今後どう転ぶかは本人次第。

「……龍宮、真名」

「それと、生徒の名前を呼ぶときはフルネームではなく、名前か名字で呼ぶといい。フルネームだとあまり良い印象は与えないよ」

「……善処しよう」

その言葉に、思わず笑みがこぼれた。

「それじゃあ、刹那たちを助けに行こうか」

龍宮の銃がアスナを拘束していた鬼の頭を打ち抜く。

それが合図だった。

「彼が来るよ」

「何!？」

白髪の少年が言うように、向こう側から杖に乗ったネギがやってくるのが見えた。

「あら、小太郎くんは足止めできなかったみたいだね」

ベリアルはけらけらと笑いながら、白髪の少年を見る。

「で、どうする？ 僕が行ってもいいけど」

「いや、ここは僕がやろう。ルビカンテ、あの子を止めて」

羽の生えた怪物が召喚され、そのままネギに突っ込む。

しかし、ネギの魔力をこめた一撃でルビカンテは消滅した。

勢いそのままに突っ込んでくるであろう一撃は、水煙によって隠された。

「無駄なことを……」

そんなことを言って、油断していたのが仇になったか、白髪の少年はネギの遅延呪文で動きを封じられた。

「でも、儀式は終了したんだけどね」

ベリアルが振り返ると、リョウメンスクナノカミが召喚されると

ころだった。

「さーで、面白くなってきた」

「イルディ先生、刹那たちを助けに行ってくれないか？」

鬼たちとの戦闘の最中、龍宮はそんなことを言い出した。

「だが、お前たちを置いていくわけには——」

「私たちなら大丈夫だ。古菲もいるからね」

「大丈夫アル。先生はネギ坊主たちを助けに行くアル」

「しかし——」

「くどい！ 生徒たちを信じるのも教師の役目だと思っけどね」

「……分かった」

イルディは決心したように頷くと、リョウメンスクナノカミの見える方向へと飛んだ。

「世話のかかる先生だ」

ネギとは別の意味で。

だが、そのほうが微笑ましいと彼女は思った。

スクナが召喚されるのを目の前で見ていたネギは、それを阻止しようとする自分の全力を放つ。

「雷の暴風！」

しかしそれは、紅蓮の炎によって阻まれた。

「何！？」

炎の先に立っていたのは、赤髪の少年だった。

「初めましてだね、ネギ・スプリングフィールド君。僕の名はベリアル。七つの大罪、傲慢を司る悪魔だ」

にたりと笑うベリアルを前にして、ネギは膝をついた。

後ろでは、戒めの魔法の効果が切れた白髪の少年がいる。

「殺しはしないけれど、自ら向かってきたということは、相応の覚悟はあるということだよ」

「人間にしては良くやったほうだと思うよ」

一歩ずつ、少年たちは近づいてくる。

「召喚！ ネギの従者、神楽坂アスナ、桜咲刹那！」

魔方阵と共にアスナと刹那が召喚される。

「へえ」

「……………」

ベリアルと少年はそれぞれ異なる反応を示す。

「それで、どうするの？ ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァインゲイト——」

少年が詠唱を開始すると同時に、黒い影が彼を殴りつけていた。

「俺の生徒に、手を出すな！」

「ッ！？」

いきなりの乱入者に、少年は殴り飛ばされ詠唱を止めることになる。

「イルディ先生！」

「やっぱり、来ましたね」

ネギたちは驚いたように、ベリアルはうれしそうに言う。

イルディの目の前には、宙に浮くベリアルと鬼神の姿がある。

だが、彼にはこの状況で、木乃香を助け出す方法が思いつかない。

白髪の少年はすぐに戻ってくるだろうし、ベリアルは自分が抑えたところで白髪の少年が残る。

唯一できることは。

「桜咲」

「え、はい」

いきなり名字だけで呼ばれたことに驚く。

「お前が近衛を助け出せ。こいつらは俺とネギ先生が相手をする」

「えっ、だけどどうやってあんな高いところまで行くのよ!」

アスナが疑問の声を上げると、刹那は決心した様子で口を開いた。

「気づいていらしたんですね?」

「まあ、元悪魔を名乗っているくらいだからな」

「どういうこと?」

「本当はこの姿は見られなくなかったのですが、そうも言ってもらえません」

寂しげな表情を見せた刹那は、ばさりと翼を広げた。

「これが私の正体。やつらと同じ化け物です」

でも、と彼女は続ける。

「お嬢様を守りたいと思っていた気持ちは本物です！」

「当たり前じゃない！ そうじゃなかったら、ずっと木乃香のことを見守ることなんて出来るわけない」

「アスナさん……」

「それに、木乃香がこれくらいで誰かを嫌いになったりするわけないでしょ。ホント馬鹿なんだから」

「アスナさん」

「さあ行つて、刹那さん！」

「はい！」

飛び立つ刹那。

その間際、刹那はネギに告げる。

「このちゃんのために頑張ってくれてありがとうございます」

その背を見送ったイルディは誰にも聞こえないように呟く。

「神楽坂には教師としての役割を持っていかれるし、刹那には感謝されないし、いいことがひとつもない」

「仕方ないですよ。彼女たちには彼女たちの視点しかないんだから」

「ッ!？」

ポンと肩を叩かれ、ネギたちを連れて距離をとる。

「そんなに驚くことないじゃないですか。どうせ、気づいてたんでしょう?。」

ベリアルが迫っていることにイルディは気づいていなかった。

「やってくれるね」

白髪の少年もそろい、二対三の戦いが繰り広げられようとしていた。

第十一話 元悪魔と修学旅行終盤（後書き）

展開が速いのと、意味不明すぎる気がしてきた。

第十二話 元悪魔と修学旅行終了（前書き）

実際には終了してません。

第十二話 元悪魔と修学旅行終了

「さて、どうしたものか」

数では有利とはいえ、実力ではあちらのほうが上。

——ぼうや、イルディ聞こえるか？

そんな中、強力な助っ人の声がした。

一分半持ちこたえること。

そうすれば、エヴァンジェリンが全て終わらせてくれるとの事だった。

ネギたちと白髪の少年が戦い始めるのを尻目に、イルディとベリアルは向き合う。

「ここなら派手にやっても大丈夫そうですね」

「……………」

相手がどんな手を使ってくるのか予想できないため、イルディは自然体で構える。

「燃えさかれ紅蓮の炎」

ベリアルが呟くと、紅き炎が二人を囲む。

「ふふふ、これで誰もここからできることは出来ない。また、入ることも」

「それは暗に俺が逃げざる得ないと言っているのか？」

「いえいえ、そういうわけではなく」

ベリアルがかざした手から火球が放たれる。

「くっ」

「ただ、邪魔者が入らないようにするためですよ」

「……………」

恐らく、エヴァンジェリンが来ることを言っているのだろう。

「本気でやらないと、人の身ですから死にますよ」

イルディとベリアルが戦闘を行っているとき、ネギたちと白髪の少年の戦いは終わりを迎えようとしていた。

アスナの一撃で少年の障壁が壊れる。

そこへネギの拳が入った。

「身体に直接拳を入られたのは、君で二度目だ。ネギ・スプリングフィールド！」

だが、少年の反撃は影から現れた人物によって阻まれる。

「ウチのぼーやが世話になったようだな」

彼女の一撃により、少年は遠くへ吹き飛ばされる。

「エヴァンジェリンさん！」

「ぼーや、これで借りは返したぞ」

その間にもスクナは結界弾により封じ込められ、エヴァンジェリンの魔法『おわるせかい』によって無残にも碎け散った。

「あっちのほうは終わったようですね」

「ぐっ、かはっ」

腹部を踏みつけられ、イルディは苦悶の声を漏らす。

「さてと、僕もそろそろ行くとしますか」

「ま、まで……」

「待ちませんよ」

二人の周りを包み込んでいた炎は消え去った。

「フェイト君もさすがに何百年も生きた吸血鬼には勝てませんでしたか」

でも、とニタリと笑うベリアル。

「僕なら勝てるかな」

「何を、するつもり、だ？」

「あなたはそこで黙っていてください」

起き上がれないイルディを残し、ベリアルは姿を消した。

白髪の少年を撃退したエヴァンジェリンは、イルディの姿を探していた。

「ぼーや、イルのやつはどこだ？」

「あつ、イルディさんは」

木乃香も助かり、イルディのことをすっかり忘れていた。

「あちらで寝てますよ」

「貴様は何者だ？」

突然目の前に姿を現したベリアルに警戒心をあらわにするエヴァンジェリン。

「あんた、さっきの！」

「初めまして、七つの大罪を司る悪魔ベリアルと申します」

丁寧に礼をして、エヴァンジェリンに殺気を向ける。

「あなたと全力で勝負したくなりまして」

「イルディ先生はどうしたのよ！」

「ああ、彼なら寝てますよ」

「私と戦いたいだと？ 貴様、私を誰だか知っているのか？」

「もちろんですよ。あなたは有名人ですからね」

挨拶代わりといった様子で、ベリアルは火球を放つ。

その範囲はその場にいる全員を巻き込むほどのものだった。

「お前たち、下がっている！」

エヴァンジェリンが急いで障壁を展開する。

「残念、後ろですよ」

「なっ！？」

いつの間に背後を取られたのか、背後からベリアル拳が迫る。

それには紅蓮の炎が纏われており、その威力は計り知れない。

ここで回避すれば、魔法関係者ではない人間は焼き尽くされてしまっただろう。

炎を食らえばエヴァンジェリンでもただではすまない。

——俺の。

声が聞こえた。

——生徒に。

あの男の声が。

「手を出すな！」

爆発音と共に現れたのは、漆黒の炎を纏った、深紅の瞳の男だった。

エヴァンジェリンを突き飛ばすと、イルディは炎を両手で、ベリアル拳を背中受けて止めた。

「があああああああああ——！」

あれほどまでに巨大な火球はイルディの手に吸収されるように消滅した。

しかし、

「イル！」

「イルディ先生！」

「かはっ」

それを防いだ代償はあまりにも大きかった。

ベリアルは彼の身体を貫通したのだ。

「それくらいやってもらわないと、張り合いがありませんからね」

ベリアルは予想の範囲だったのか、拳についた血を払う。

「貴様ッ！」

「おお、怖い怖い。あなたを仕留められなかったのは残念ですが、今回はよしとしましょう。それでは」

燃えるようにベリアルは姿は消えてなくなった。

「イル！」

「イルディ先生！」

その場に居た全員が駆け寄ると、イルディはうつすらと目を開けた。

「ぜ、んいん、ぶじ、か？」

「……ああ、無事だ」

「そ、れは、よ、かった」

「全然良くないだろうが！ お前が無事じゃない！」

泣きじゃくるエヴァンジェリンの頭に、イルディは手をのせる。

「泣くな、よ」

「な、泣いてなんていない。……どうして私を庇った？ 私は不老不死だぞ」

「やつの炎は、不死を、殺せる。だから、げほっ」

「分かった。もう喋るな！」

「俺、お前たちと、会えて、よかつ——」

イルディの手から力が抜ける。

「イル？ おい、イル！」

第十二話 元悪魔と修学旅行終了（後書き）

さて、これからどうしたものか。
イルディ先生死んじゃうのか？
それとも、

- 1 ・木乃香と仮契約して復活
- 2 ・何故かベリアルが助けてくれる
- 3 ・新たなオリ主登場！？
- 4 ・その他

感想で何番がいいか教えてくださると幸いです。

第十三話 元悪魔と絶対安静（前書き）

今回は短いです。

さらに、先が見えなくなってきた。

第十三話 元悪魔と絶対安静

「う、ん？　ここは……」

目を覚ますと、イルディは布団に寝かされていた。

身体を動かそうとするも、どうにも重く感じる。

気になって見てみると、身体の上にはエヴァンジェリンが、右腕には茶々丸が、左腕には木乃香と刹那がくっついて眠っていた。

「何だ、この状況は？」

男の身としては喜ばしいことなのかもしれないが、如何せん状況が飲み込めない。

「ケケケ、モウ起キタノカヨ」

「チャチャゼロ？　この状況は一体？」

頭の上にいるチャチャゼロに疑問を投げかける。

「ソレハ御主人カラ聞クンダナ」

「エヴァ、起きてくれ」

「……むう、何だ？」

寝ぼけ眼で状況を確認するエヴァンジェリン。

自分の下にいたイルディが目を覚めたことに気づき、思いっきり抱きついてきた。

「よかった。イル、本当に良かった」

涙ぐむエヴァンジェリンに、イルディは頭をなでてやる。

「俺は一体どうなったんだ？」

「ああ、それなんだが……」

エヴァンジェリンが言いにくそうにしていると、木乃香たちも目を覚ました。

「イルディ先生！ 目が覚めたんやな」

「ああ、だがどうしてこう、俺の周りでみんな寝てるんだ？」

「心配だったからに決まってるじゃありませんか！」

刹那が今にもつかみかからんかといった様子で、イルディに詰め寄る。

「それで、何故俺は生きてるんだ？」

「ウチと仮契約したからや」

「私の眷属にしたからだ」

「は？」

言われてみれば木乃香とはラインのようなものを感じるし、エヴァンジェリンからは惹かれるような何かがある。

「つまりどういうことだ？」

「近衛木乃香と仮契約することによって、お前は一命を取り留めた。だが」

「それだけでは自己治癒能力が低かったのです」

「なるほど、それでエヴァの手によって俺は吸血鬼にされたわけか」

「すまん。これ以外に方法が見つからなかった」

「別に構わんさ。俺はこうして生きている。それだけで十分だ」

そこまで言って、刹那と向き合う。

「ここから逃げ出さなかったということは、木乃香のそばにいたいとを決めたのだな？」

「え、いや、私は……」

「まあ、俺のせいで逃げる機会を失ったともいえるか。どうする？
今からでも逃げるか？」

「私は」

「せつちゃんはウチといるのは嫌なんか？」

「掟、ですから。あの姿を見られた以上、ここにはもう……」

沈黙。

イルディは口を開く。

「桜咲。掟と近衛どちらが大事だ？」

「それは……」

「どちらだ？」

正直に答えろと、イルディの視線は語っていた。

「そんなの、お嬢様に決まっているではありませんか！」

「ウチもせつちゃんと一緒にいたい！」

「お嬢様……」

「ならば話は簡単だ。見なかったことにすればいい」

「え？」

「あの時、桜咲が近衛を助けたのは事実だが、その過程はどうでもいいということだ」

それに、とイルディは続ける。

「桜咲は近衛のことを想い、近衛は桜咲のことを想っている。共にいる理由はそれで十分だろう」

「……せつちゃん」

「……お嬢様」

互に見つめあう二人。

「いい雰囲気のところ悪いが、問題が発生したぞ」

水を差すように出現したのは龍宮であった。

「ホテルにおいてきた身代わりが暴走を始めたらしい」

「何だって!？」

「ほら刹那。身代わりはお前の専門だろ」

「ほな、いこかせつちゃん」

「はい、お嬢様」

龍宮と木乃香に連れられて、刹那はイルディの部屋を後にした。

「どれ、俺も……」

「駄目だ」

立ち上がろうとしたイルディは、エヴァンジェリンによって押さえつけられた。

「何をする？」

「今日のお前は絶対安静。分かったな」

「だが、教師として生徒たちを助けなければ――」

「お前はそうやっていつも自分を犠牲にしようとする。たまには自分のことを考えたらどうなんだ？」

「……エヴァがそういうのなら」

しぶしぶといった様子で布団に横になるイルディ。

「それにしてもいいのか？」

「何がだ？」

「せっかくの修学旅行だ。茶々丸と一緒に楽しんでくればいいじゃないか」

「今はお前を見張っておかないとな」

「そうですね。そうしないとイルさんは無茶しかねませんから」

「ケケケ、イルディモ御主人達ノ前ジャ形無シダナ」

三人に見守られながら、イルディは目を閉じた。

大切な人たちの無事を心から喜びながら。

第十三話 元悪魔と絶対安静（後書き）

オリ主がうらやましい。

結局、こんな形になりました。

吸血鬼になつたらどんなメリットデメリットがあるのか考えずに書きました。さらに、刹那と木乃香のフラグを建てる為に無理やり仮契約させた。

木乃香と仮契約したら吸血鬼にする必要なくね？と思ったそのあなた。

その通りです。

感想でその他を選んだ方の意見を見て、取り入れなくなつてやってしまいました。

後悔も反省もしていない。

むしろエヴァと仮契約させたかった。

白雪姫的発想でキスで目覚めさせたかった。

何故そうしなかったかという、学園祭編で仮契約させる予定だからです。

どういう経緯でそうなるのかは、まだ考えてません。

ラストの場面は考えてるんですけどね。それはまだ秘密ということで今回はここまで。

長くなりましたが、閲覧いただきありがとうございます。次回、感想が怖いですが頑張つて書いていこうと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2299u/>

元悪魔とネギまの世界

2011年10月7日03時33分発行